

## 研究資料

## 宮崎県内の幼稚園・保育園における環境教育の実態調査

磯部美良\*, 遠藤 晃

南九州大学 人間発達学部 子ども教育学科

2013年10月11日受付; 2014年1月27日受理

## A survey of environmental education in kindergartens and nursery schools in Miyazaki prefecture

Miyoshi Isobe\*, Akira Endo

*Faculty of Human Development, Minamikyusyu University,  
Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan*

Received October 11, 2013; Accepted January 27, 2014

The objective of the present study was to assess the needs and evaluate the implementation of environmental education in kindergartens and nursery schools in Miyazaki prefecture. The results showed that: (1) activities and programs related to environmental education such as “dietary education”, “nature observation and free play in nature”, and “farming experience” are heavily emphasized in their daily activities; (2) the extent to which children experience activities related to nature and their environment seems to differ according to several factors such as the facilities available and the conditions of the surrounding areas. Those differences are particularly noticeable in activities that put emphasis in sensitivity with the involvement with nature and awareness of natural systems; and (3) the presence of the teachers and caregivers is of great importance in promoting environmental education in early childhood. The results also pointed out the necessity of environmental education training for those professionals.

**Key words:** environmental education, early education, dietary education, farming experience.

## 目 的

近年、環境教育の重要性が世界的に認められるようになり、生涯発達の観点から、幼児期より環境教育をスタートさせることの必要性が指摘されるようになってきている(有賀, 2008; 井上, 2012)。我が国においても、平成23年6月には「環境保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」が改正・公布され、「幼児期から」という文言が盛り込まれるなど、法制度の整備もされつつある。

幼児期からの環境教育を推進・普及するためには、幼稚園や保育園などの保育現場における実施実態を把握し、その実態に基づいて、保育者養成や現職者研修等のあり方を検討し、提言していく必要があるだろう。そこで、本研究では、宮崎県内の幼稚園・保育園等における環境教育の実施実態および環境教育を推進する

にあたっての現場の課題やニーズを明らかにすることを目的とする。

なお、本研究においては、井上(2012)に従い、幼児期の環境教育を「幼児期の発達理解をもとに、子どもの主体的な遊びを重視しながら、持続可能な社会を主体的に形成する大人へと育つ基盤となるような環境観を育成する営み」と定義する。そして、その具体的なあり方としては、飼育栽培や戸外保育といった従来型の自然との関わりに加えて、「幼児期の環境教育」を意識した内容、すなわち、「感性面の育ちを重視し自然の循環性や多様性などの特質を意識した自然との触れあい方(井上, 2001)」を含めることとする。

## 方 法

## 調査対象

宮崎県内全ての幼稚園、保育園(所)、認可外保育施設、児童館、認定こども園、計555園に対して調査

\*連絡著者: E-mail, myinho717@yahoo.co.jp

用紙を郵送し、204園から回答を得た。回収率は36.8%であった。内訳を表1に示す。

なお、調査時期は2011年3～4月であった。

## 調査内容

調査用紙は以下の質問項目から構成された。

**回答者の属性:** 回答者の職務とその経験年数, 年齢。

**園の特性:** 幼保等の別 (幼稚園, 保育園, 認可外保育施設, 児童館, 認定こども園), 園の周辺環境 (市街地, 住宅街, 農漁村部, 山間部, その他) のそれぞれから該当するものを一つ選択。なお, 分析では, 幼保等の別の「児童館」と「認定こども園」はデータが少なかったため除外した。

**保育の方法:** 園での保育の方法について, 「1. 園児が自由に活動を選択して行うことが中心 (以下, 自由活動中心と略記)」「2. 教員・保育士が活動を設定して園児が行うことが中心 (以下, 設定活動中心と略記)」「3. 1と2が半々くらい (以下, 自由・設定活動混合と略記)」「4. その他」の中から最も近いものを選択。

**学級編成:** 園の学級編成について, 「1. 同年齢保育が基本」「2. 異年齢保育が基本」「3. その他」の中から最も近いものを選択。

**「環境教育」の認知度:** 井上 (2001) を参考に, 「環境教育」の認知度について, ①「環境教育」という言葉を知っていたか, ②「環境教育」という言葉に対して, どのようなイメージを持っているか (具体的な選択肢は表6に示す) の2点をたずねた。

**教育・保育活動における自然の重要性:** 自然を日頃の教育・保育活動へ活かすことは大切だと思うかについて, 「はい」「いいえ」「どちらでもない」から1つを選択。

**通常の保育活動:** 保育時間内に学級全員で行う諸活動について, 重点を置いている程度をたずねた。図4・表7に示した活動について, 重点を置いている程度を「とても重点を置いている (1点)」「まあ重点を置いている (2点)」「あまり重点を置いていない (3点)」「当該の活動はない (4点)」の4段階評定で回答。

**自然と関わる活動:** 井上 (2001) の「自然や環境に関する活動を勤務園の子どもたちが経験している程度」に関する10項目を用いた。この項目群は, (a) 従来型の自然と関わる活動 (5項目), (b) 感性を重視した自然との関わり (3項目), (c) 自然の循環性や多様性に気づく活動 (2項目) の3種類から構成されている。具体的な項目内容は, 図5・表8に示す。回答は, 「日常的にしている (1点)」「かなりしている (2点)」「時々している (3点)」「ほとんどしていない (4点)」「全くし

ていない (5点)」の5段階評定で求めた。

**環境教育推進に関する自由記述:** 環境教育・保育活動を推進するためには, どのようなことが必要だと考えるかについて, 自由記述を求めた。

## 結果と考察

### 回答者の属性

表2に示したように, 回答者は園長と主任が中心であった。また, 職務の経験年数は10年以上のベテランが最も多く (表3), 50代の回答者が過半数を超えた (表4)。

### 調査対象園の特性

図1からわかるように, 調査対象園の周辺環境は, 住宅地が最も多く, 農漁村部, 山間部, 市街地がほぼ同数であった。保育形式については, 自由・設定活動混合を選択した園が半数を占め, 次いで設定活動中心が多く, 自由活動中心であるとした園は14園 (7.0%) にとどまった (図2)。また, 学級編成としては, 同年齢保育が基本であるとした園が多数であったが, 異年齢保育を採用する園も64園 (32.6%) あった (図3)。

### 環境教育の認知度等

「環境教育」という言葉を知っているかどうかをたずねたところ, 約75%の回答者が「知っていた」と答えた (表5)。この数値は, 兵庫県の全幼稚園を対象とした1997年の調査 (井上, 2001) におけるパーセンテージ (86.7%) よりも低い。また, 「環境教育」という

表2. 回答者の職務

項目	回答者数 (%)
園長	115 (54.5)
所長・施設長	19 (9.0)
理事長	6 (2.8)
副園長・教頭・副所長・副施設長	13 (6.2)
主任	49 (23.2)
その他	9 (4.3)

表3. 職務の経験年数

項目	回答者数 (%)
5年未満	74 (35.9)
5年～9年	47 (22.8)
10年以上	85 (41.3)

表1. 回収園数と回収率

幼保等の別	有効送付数	回収数	回収率 (%)
幼稚園	109	33	30.3
保育園	359	154	42.9
認可外保育施設	60	11	18.3
児童館	10	2	20.0
認定こども園	17	4	23.5
計	555	204	36.8

表4. 回答者の年齢

項目	回答者数 (%)
20～29歳	2 (1.0)
30～39歳	22 (10.7)
40～49歳	44 (21.4)
50～59歳	87 (42.2)
60～69歳	42 (20.4)
70歳以上	9 (4.4)

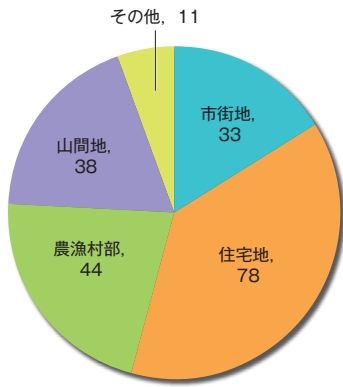


図1. 園の周辺環境

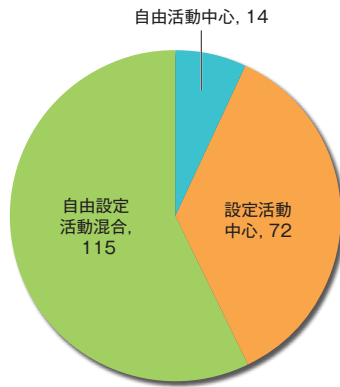


図2. 保育の方法

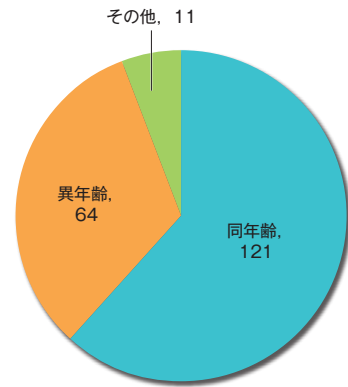


図3. 学級編成

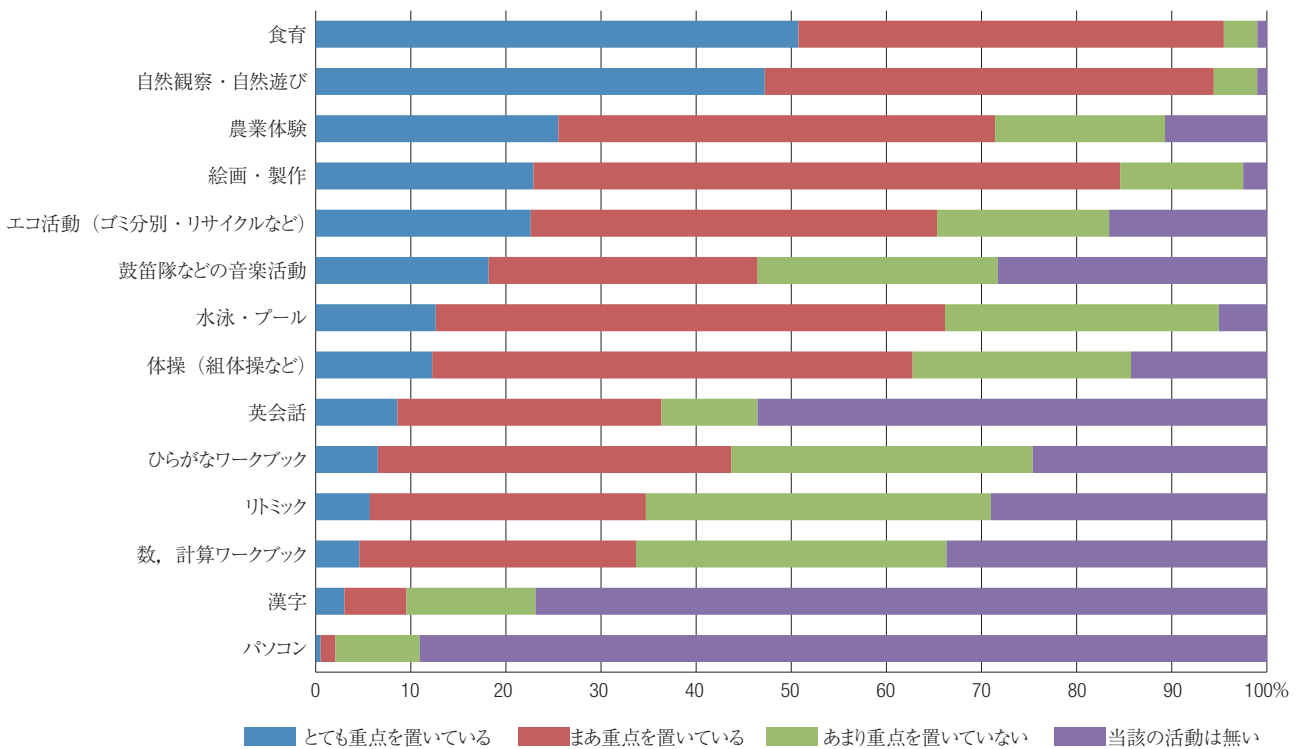


図4. 保育全般の諸活動について重点を置いている程度

言葉に対するイメージをたずねたところ、約半数の回答者が「環境をとおして行う教育」と答えて、「環境問題を解決するための教育」と認識している回答者は約6%にとどまった(表6)。こうした傾向は、井上(2001)の結果とほぼ同様であり、井上の調査から10年以上を経た現時点でも、「環境」という用語が多用される幼児教育の分野においては、「用語上の混乱(井上, 2001)」が見られる状況に変わりはないといえる。ただし、「自然を日頃の教育・保育活動へ活かすことは大切だと思うか」の設問に対しては、「はい」を選択した回答者が188園(92.2%)と圧倒的多数で、「どちらともいえない」の回答は13園(6.4%)、「いいえ」の

表5. 「環境教育」という言葉は知っていたか

項目	回答者数 (%)
知っていた	148 (75.1)
知らなかった	49 (24.9)

表6. 「環境教育」という言葉のイメージ

項目	回答者数 (%)
環境をとおして行う教育	99 (49.7)
幼児を含む人間を取り巻く環境を理解するための教育	87 (43.7)
環境問題を解決するための教育	12 (6.0)
その他	1 (0.0)

回答はわずか1園であった。

### 保育全般の諸活動

全体の傾向 図4は、日頃の保育で行われている様々な活動について、「とても重点を置いている」との回答が多かった順序に並べたものである。ここからわかるように、「食育」「自然観察・自然遊び」「農業体験」といった環境教育に関わる活動が上位3つを占めており、これらの活動が日頃の保育活動において非常に重視されていることが明らかとなった。また、「エコ活動（ゴミ分別・リサイクル）」についても、「とても重点を置いている」「まあ重点を置いている」を合わせて6割を超える回答者が重点を置いていると回答していた。昨今の“エコ・ブーム”を背景に、宮崎県は、環境教育推進の一環として、環境教育に取り組む園を『エコ幼稚園・保育所』に認定し、環境配慮行動の教育（ゴミの分別等）、環境に関する実践行動（植物の栽培、リサイクル活動等）、環境関連施設学習（ゴミ処理場の見学等）、エコ教材の整備（分別回収箱等）、環境保全の意識改善（親子環境教室の開催等）といった“エコ活動”の推進に努めており、本研究の結果は、その成果の表れの一つといえるだろう。

園の特性による違い 次に、対象園の特性によって園での活動の重点の置き方に違いがあるかどうかを調べるために、以下の4つの特性ごとに分散分析あるいはt検定を用いて比較検討を行った。分散分析の多重比較にはTukeyの多重比較を用いた。①幼保の別：幼稚園、保育園、認可外保育施設の3群比較、②園の周辺環境：市街地、住宅地、農漁村部、山間部の4群比較、③保育の方法：自由活動中心、設定活動中心、自由・設定活動混合の3群比較、④学級編成：同年齢保育、異年齢保育の2群比較。結果を表7にまとめる。

先の分析において、ほとんどの園が「食育」を重視していることは見てきたが、とくに、＜認可外保育施

設＞よりも＜幼稚園＞と＜保育園＞が、また、＜設定活動中心＞よりも＜自由・設定活動混合＞の園が、「食育」を重視していると回答していた。「食育」については、平成17年には食育基本法、翌年には食育推進基本計画が制定されており、幼稚園と保育園は、そうしたガイドラインに沿って、保育を実践していることが示唆される。「農業体験」を重視する程度については、＜市街地＞よりも＜農漁村部＞が高かった。このことは、農漁村部に位置する園においては、農地へのアクセスの容易さや地域の協力体制に加え、農を保育に取り入れることの重要性および必要性に対する認識の高さが背景にあるものと考えられる。

なお、環境教育に関わる活動以外については、次のような結果であった。まず、幼稚園・保育園・認可外保育施設の差があった項目は、「鼓笛隊などの音楽活動」「体操（組体操など）」「英会話」「ひらがなワークブック」の4つであり、いずれも、＜認可外保育施設＞に比べて＜幼稚園＞あるいは＜保育園＞の方が重視していた。周辺環境の差があった項目は2つであり、「鼓笛隊などの音楽活動」では＜山間部＞より＜住宅地＞と＜農漁村部＞が、「体操（組体操）」では＜市街地＞より＜住宅地＞の方が重視していた。自由・設定で差があった項目は4つであり、「英会話」「ひらがなワークブック」「数、計算ワークブック」では＜設定活動中心＞がその他よりも当該活動を重視していたが、「鼓笛隊などの音楽活動」については＜自由・設定活動混合＞の方が＜設定活動中心＞よりも重視していた。最後に、学級編成で差のあった項目は7つと多く、「鼓笛隊などの音楽活動」「水泳・プール」「体操（組体操など）」「英会話」「リトミック」「数、計算ワークブック」「漢字」といった発達年齢を考慮して取り組む必要のある活動については、＜同年齢保育＞が＜異年齢保育＞よりも当該活動を重視していた。

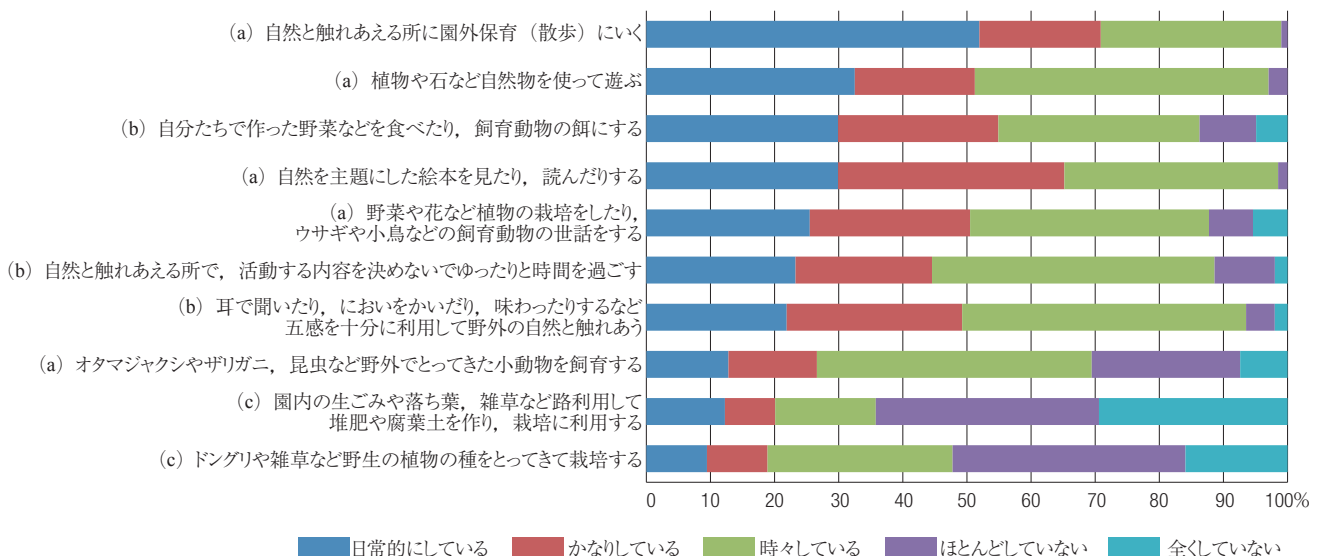


図5. 自然に関する諸活動について園児が経験している程度

注：図中の（a）は従来型の自然とのかかわる活動，（b）は感性を重視した自然とのかかわり，（c）は自然の循環や多様性に気づく活動である。

表7. 保育全般の諸活動に関する設置条件ごとの平均値 (SD) と分散分析および t 検定の結果

	幼保等の別				周辺環境				F 値 多重比較
	幼稚園	保育園	認可外	F 値 多重比較	市街地	住宅地	農漁村部	山間部	
食育	1.55 (.51)	1.51 (.58)	2.00 (1.18)	F = 3.31* 幼, 保 < 認	1.66 (.65)	1.58 (.62)	1.49 (.59)	1.46 (.61)	
自然観察・自然遊び	1.67 (.74)	1.54 (.57)	1.73 (.90)		1.59 (.67)	1.64 (.63)	1.52 (.59)	1.58 (.68)	
農業体験	1.91 (.77)	2.15 (.91)	2.55 (1.29)		2.56 (1.05)	2.15 (.84)	1.83 (.85)	2.09 (.90)	F = 4.24** 農 < 市
絵画・製作	1.76 (.85)	2.00 (.66)	1.82 (.75)		1.90 (.64)	1.93 (.63)	2.02 (.69)	1.97 (.69)	
エコ活動 (ゴミ分別・リサイクルなど)	2.16 (.81)	2.24 (1.01)	2.82 (1.17)		2.34 (1.10)	2.42 (.97)	2.08 (.94)	2.11 (.97)	
鼓笛隊などの音楽活動	2.49 (.87)	2.60 (1.10)	3.67 (.24)	F = 4.76* 幼, 保 < 認	2.66 (1.12)	2.54 (1.08)	2.39 (1.02)	3.05 (.94)	F = 3.01* 住, 農 < 山
水泳・プール	2.15 (.62)	2.25 (.76)	2.63 (.52)		2.23 (.73)	2.30 (.79)	2.30 (.73)	2.24 (.68)	
体操 (組体操など)	2.06 (.66)	2.40 (.87)	3.00 (1.10)	F = 5.28** 幼 < 保 < 認	2.71 (.94)	2.21 (.87)	2.50 (.83)	2.47 (.81)	F = 2.75* 住 < 市
英会話	2.75 (1.05)	3.12 (1.08)	3.70 (.68)	F = 3.39* 幼 < 認	3.00 (1.16)	3.10 (1.06)	2.93 (1.09)	3.30 (1.00)	
ひらがなワークブック	2.79 (1.11)	2.70 (.83)	3.40 (.31)	F = 2.96 † 保 < 認	2.81 (.97)	2.66 (.98)	2.70 (.80)	2.86 (.79)	
リトミック	2.64 (.94)	2.92 (.87)	2.90 (1.10)		2.82 (1.01)	2.82 (.86)	2.95 (.91)	2.97 (.83)	
数, 計算ワークブック	2.94 (1.05)	2.94 (.85)	3.40 (.97)		2.90 (1.01)	2.84 (.96)	2.93 (.79)	3.22 (.75)	
漢字	3.59 (.71)	3.63 (.76)	3.90 (.32)		3.77 (.56)	3.54 (.88)	3.64 (.72)	3.73 (.61)	
パソコン	3.78 (.63)	3.89 (.34)	4.00 (0.00)		3.94 (.25)	3.81 (.57)	3.81 (.42)	3.89 (.32)	

	自由/設定の別				学級編成		
	自由活动 中心	設定活動 中心	自由設定 混合	F 値 多重比較	同年齢	異年齢	t 値
食育	1.36 (.50)	1.70 (.62)	1.46 (.60)	F = 4.01* 混 < 設	1.52 (.54)	1.56 (.64)	
自然観察・自然遊び	1.37 (.49)	1.72 (.61)	1.53 (.63)	F = 2.91 †	1.63 (.61)	1.50 (.64)	
農業体験	2.29 (.99)	2.20 (.97)	2.08 (.89)		2.11 (.89)	2.16 (.95)	
絵画・製作	2.07 (.62)	1.93 (.71)	1.95 (.66)		1.86 (.68)	2.03 (.67)	
エコ活動 (ゴミ分別・リサイクルなど)	2.07 (.73)	2.39 (1.08)	2.25 (.99)		2.27 (1.02)	2.25 (.96)	
鼓笛隊などの音楽活動	2.79 (1.05)	2.30 (1.13)	2.84 (1.00)	F = 5.87** 混 < 設	2.52 (1.07)	2.84 (1.11)	t = 1.89 † 同 < 異
水泳・プール	2.23 (.83)	2.26 (.84)	2.25 (.66)		2.18 (.74)	2.43 (.69)	t = 2.16* 同 < 異
体操 (組体操など)	2.71 (.99)	2.26 (1.00)	2.42 (.77)		2.23 (.83)	2.67 (.92)	t = -3.11** 同 < 異
英会話	3.43 (1.02)	2.80 (1.12)	3.23 (1.01)	F = 4.31* 設 < 混	2.97 (1.06)	3.27 (1.09)	t = -1.75 † 同 < 異
ひらがなワークブック	3.36 (.75)	2.46 (.92)	2.84 (.85)	F = 7.79** 設 < 自, 混	2.64 (.90)	2.83 (.87)	
リトミック	3.21 (.70)	2.93 (.93)	2.82 (.89)		2.76 (.87)	3.13 (.82)	t = -2.73** 同 < 異
数, 計算ワークブック	3.50 (.65)	2.78 (.98)	3.00 (.84)	F = 4.24* 設 < 混	2.82 (.91)	3.14 (.81)	t = -2.43* 同 < 異
漢字	3.71 (.47)	3.63 (.77)	3.66 (.72)		3.57 (.80)	3.81 (.39)	t = -2.68** 同 < 異
パソコン	3.86 (.36)	3.87 (.49)	3.84 (.42)		3.85 (.44)	3.85 (.47)	

\*\* p &lt; .01, \* p &lt; .05, † p &lt; .10

注: 数値が小さいほど当該活動を重視していることを表す。

### 自然と関わる活動

全体の傾向 図5は、自然や環境に関する活動を園の子どもたちが経験している程度について、「日常的にしている」との回答が多かった順序に並べたものである。経験頻度が高かった活動は、「自然と触れ合える所に園外保育（散歩）に行く」「植物や石など自然物を使って遊ぶ」「自然を主題にした絵本を見たり、読んだりする」「野菜や花など植物の世話をしたりウサギや小鳥などの飼育動物の世話をする」といった従来型の自然とかわる活動であった。「自分たちで作った野菜などを食べたり、飼育動物の餌にする」頻度も高かったが、これは、「食育」の一環として行われているものと推察される。

他方、「自然と触れ合える所で、活動する内容を決めないでゆったりと時間を過ごす」といった感性を重視した自然との関わりや、「園内の生ごみや落ち葉、雑草などを利用して堆肥や腐葉土を作り、栽培に利用する」といった自然の循環に気づく活動については、「ほとんどしていない」の割合が高くなっていった。こうした、「幼児期の環境教育」を意識した活動の実施頻度の低さは、井上（2001）や井上（2004）の先行研究の結果と類似しており、従来型の自然と関わる活動はよく実施されているものの、「幼児期の環境教育」の意義については、まだ十分に意識されていないことが示唆される。

園の特性による違い これら自然にかかわる活動についても、園の特性によって経験頻度に違いがあるかどうか調べるために、比較検討を行った（表8）。まず、幼保等の別による差は「植物や石など自然物を使って遊ぶ」「自然と触れ合える所で、活動する内容を決めないでゆったりと過ごす」の2項目で見られ、いずれも＜認可外保育施設＞が＜幼稚園＞あるいは＜保育園＞よりも経験頻度が高かったが、有意傾向にとどまった。周辺環境による差は、10項目中5項目（うち3項目は有意傾向）に見られ、概して、＜農漁村部＞と＜山間部＞の園は、＜市街地＞の園よりも実践頻度が高かった。その内、有意差の見られた「自分たちで作った野菜などを食べたり飼育動物の餌にする」「園内の生ごみや落ち葉、雑草などを利用して堆肥や腐葉土を作り、栽培に利用する」の2項目は、いずれも農業体験に関する活動であり、やはり農漁村部や山間部に位置する園においては、農を日頃の保育に導入しやすいことがうかがえる。

自由・設定の差があったのは10項目中5項目であり、上述の農に関する活動2項目に加えて、「自然と触れ合える所で、活動する内容を決めないでゆったりと過ごす」「耳で聞いたり、においをかいだり、味わったりするなど五感を十分に利用して野外の自然と触れ合う」という感性に関わる2つの項目において、＜自由活動中心＞が＜設定活動中心＞よりも経験頻度が高かった。同じような差は、「オタマジャクシやザリガニ、昆虫など野外でとってきた小動物を飼育する」頻度においても見られた。園の活動に関する先の分析結果と合わせて考えると、自由活動中心の園は設定活動中心の園と比較して、英会話やひらがな、数・計算のワークブックを実施しない代わりに、園児が存分に自然と触れ合う時間を確保することに重点を置く傾向にあるといえ

る。

学級編成による差も10項目中5項目（うち1項目は有意傾向）で見られ、＜同年齢保育＞よりも＜異年齢保育＞において、自然に関わる活動が多く取り入れられていた。

環境教育推進に関する自由記述: 表9は、環境教育を推進するにあたって必要と考えられる事柄に関する自由記述の結果を、「自然と触れ合う園外保育」「保育者の重要性、問題点、養成等」「五感を使った体験の重要性」「農業体験」「安全面・計画の重要性・保護者」「日本の四季・伝統」「エコ活動」の7つのカテゴリーにまとめたものである。これらを概観すると、幼児期の環境教育を推進するにあたっては、自然と直接触れ合う体験が大切であり、散歩や遠足といった園外保育や農業体験等を十分に経験させたいとの意見が多かった。また、自然を活かした保育活動を実践するためには保育者の存在が極めて重要で、年間を見通した指導計画や教材研究、安全面の確保、保護者との連携等をしっかり行う必要があると指摘されていた。一方で、「保育者の重要性、問題点、養成等」のカテゴリーの代表例にもあるように、最近では、自然のことを知らない保育士が増えているとの記述が目立ち、まずは保育士自身が研修等を通して自然に関して学ぶ必要があること、また、保育士養成校において自然に関する学習を取り入れるべきではないかとの指摘が多く見られた。

### おわりに

以上、宮崎県内の幼稚園・保育園等における環境教育の実態実態をみてきた。結果をまとめると、(1)「食育」「自然観察・自然遊び」「農業体験」といった環境教育に関わる活動は、日頃の保育活動において非常に重視されていた、(2)自然や環境に関する活動を園児が経験している程度は、幼保等の別、園の周辺環境等に左右されており、そうした違いは、とりわけ、感性を重視した自然との関わりに関する活動や、自然の循環に気づく活動において顕著に表れた、(3)幼児期の環境教育を推進していくにあたっては保育者の存在が極めて重要であり、自然や環境に関する研修の必要性が指摘された。

このように、宮崎県内の幼稚園・保育園等においては、「環境教育」という用語こそ十分に周知されているとはいえないが、食育や自然遊びといった自然や環境に関わる保育活動はよく実践されていることが明らかとなった。また、本研究においても、自然や環境教育に関わる保育活動は園の特性によって違いがあることが示されたが、井上・無藤（2006）や井上（2004）が指摘するように、そうした違いの解消には保育者の意識改革が大きな役割を果たすとすれば、現職保育者や保育士を志望する学生に対し、幼児の感性面の育ちや、自然の循環性や多様性等に気づく活動を重視した、「幼児期ならではの環境教育」に焦点を当てた研修の実施や情報提供をより一層充実させていくことが求められる。

表8. 自然と関わる活動の実施頻度に関する設置条件ごとの平均値 (SD) と分散分析および t 検定の結果

	幼保等の別				周辺環境				F 値 多重比較
	幼稚園	保育園	認可外	F 値 多重比較	市街地	住宅地	農漁村 部	山間部	
(a) 自然と触れ合えるところに園外保育（散歩）に行く	2.00 (.89)	1.71 (.86)	1.82 (.98)		1.70 (.88)	1.74 (.86)	1.75 (.92)	1.79 (.94)	
(a) 植物や石等自然物を使って遊ぶ	2.44 (.89)	2.17 (.94)	1.73 (.91)	F=2.64 † 認<幼	2.30 (.88)	2.21 (.91)	1.95 (.99)	2.18 (.93)	
(b) 自分たちで作った野菜などを食べたり、飼育動物の餌にする	2.62 (1.23)	2.24 (1.06)	2.91 (1.76)	F=2.95 †	2.58 (1.32)	2.58 (1.16)	2.05 (.99)	2.05 (1.04)	F=3.43* 農, 山<住
(a) 自然を主題にした絵本を見たり、読んだりする	1.94 (.74)	2.12 (.83)	1.82 (.98)		2.00 (.79)	2.01 (.78)	2.05 (.89)	2.16 (.92)	
(a) 野菜や花など植物の栽培をしたり、うさぎや小鳥などの飼育動物の世話をする	2.51 (1.05)	2.40 (1.07)	2.73 (1.74)		2.80 (1.24)	2.48 (1.07)	2.18 (1.08)	2.18 (1.06)	F=2.64 † 農, 山<市
(b) 自然と触れ合える所で、活動する内容を決めないでゆったりと時間を過ごす	2.53 (.93)	2.48 (1.00)	1.82 (1.17)	F=2.38 † 認<保	2.50 (1.08)	2.66 (.88)	2.25 (1.10)	2.21 (.93)	F=2.601 † 農, 山<市
(b) 耳で聴いたり、においをかいだり、味わったりするなど五感を十分に利用して野外の自然と触れ合う	2.58 (.87)	2.35 (.96)	2.09 (.94)		2.61 (.99)	2.51 (.92)	2.19 (.91)	2.16 (.86)	F=2.60 † 山<住
(a) オタマジャクシやザリガニ、昆虫など野外でとってきた小動物を飼育する	2.97 (.97)	3.01 (1.07)	3.00 (1.55)		3.12 (1.22)	3.00 (.97)	2.82 (1.19)	3.11 (1.06)	
(c) 園内の生ゴミや落ち葉、雑草などを利用して堆肥や腐葉土を作り、栽培に利用する	4.00 (.89)	3.56 (1.34)	3.55 (1.70)		4.06 (1.12)	3.78 (1.12)	3.34 (1.43)	3.21 (1.47)	F=3.74* 農, 山<市
(c) どんぐりや雑草など野生の植物の種をとってきて栽培する	3.41 (.93)	3.44 (1.15)	3.27 (1.56)		3.53 (1.05)	3.43 (1.05)	3.36 (1.37)	3.38 (1.19)	

	自由/設定保育				学級編成		
	自由活动 中心	設定活動 中心	自由設定 混合	F 値 多重比較	同年齢	異年齢	t 値
(a) 自然と触れ合えるところに園外保育（散歩）に行く	1.71 (.99)	1.86 (.92)	1.71 (.86)		1.74 (.87)	1.81 (.96)	
(a) 植物や石等自然物を使って遊ぶ	1.93 (1.00)	2.35 (.94)	2.12 (.92)		2.30 (.94)	1.94 (.91)	t = 2.53* 異<同
(b) 自分たちで作った野菜などを食べたり、飼育動物の餌にする	1.86 (.86)	2.60 (1.22)	2.23 (1.09)	F=3.69* 自, 混<設	2.42 (1.13)	2.09 (1.15)	t = 1.85 † 異<同
(a) 自然を主題にした絵本を見たり、読んだりする	1.71 (.91)	2.14 (.82)	2.05 (.83)		2.16 (.81)	1.92 (.86)	
(a) 野菜や花など植物の栽培をしたり、うさぎや小鳥などの飼育動物の世話をする	2.50 (1.02)	2.55 (.12)	2.32 (.11)		2.45 (1.06)	2.25 (1.18)	
(b) 自然と触れ合える所で、活動する内容を決めないでゆったりと時間を過ごす	1.93 (.92)	2.77 (1.04)	2.34 (.96)	F=6.31** 自, 混<設	2.53 (1.00)	2.20 (1.06)	t = 2.09* 異<同
(b) 耳で聴いたり、においをかいだり、味わったりするなど五感を十分に利用して野外の自然と触れ合う	1.79 (.80)	2.63 (.92)	2.29 (.93)	F=6.06** 自, 混<設	2.51 (.91)	2.06 (.93)	t = 3.14** 異<同
(a) オタマジャクシやザリガニ、昆虫など野外でとってきた小動物を飼育する	2.36 (1.22)	3.13 (1.03)	2.97 (1.10)	F=2.95 † 自<設	2.99 (1.06)	2.84 (1.14)	
(c) 園内の生ゴミや落ち葉、雑草などを利用して堆肥や腐葉土を作り、栽培に利用する	3.07 (1.49)	3.89 (1.23)	3.51 (1.33)	F=3.16* 自<設	3.77 (1.15)	3.25 (1.60)	t = 2.31* 異<同
(c) どんぐりや雑草など野生の植物の種をとってきて栽培する	2.86 (1.21)	3.51 (1.05)	3.39 (1.20)		3.44 (1.05)	3.33 (1.34)	

\*\* p &lt; .01, \* p &lt; .05, † p &lt; .10

注1: 数値が小さいほど当該活動を経験していることを表す。

注2: 表中の (a) は従来型の自然とかかわる活動, (b) は感性を重視した自然とのかかわり, (c) は自然の循環や多様性に気づく活動である。

## 要約

本研究の目的は、宮崎県内の幼稚園・保育園における環境教育の実施実態および環境教育を推進するにあたっての現場の課題やニーズを明らかにすることであった。宮崎県内の幼稚園、保育園等を対象に郵送に

よる質問紙調査を実施した結果、(1)「食育」「自然観察・自然遊び」「農業体験」といった環境教育に関わる活動は、日頃の保育活動において非常に重視されていた、(2)自然や環境に関する活動を園児が経験している程度は、幼保等の別、園の周辺環境等の特性に左右されており、そうした違いは、とりわけ、感性を重視した自然との

表9. 環境教育推進に関する自由記述の分類と代表例

分類	自由記述の代表例
自然と触れ合う 園外保育	お散歩、遠足などを通して、身近な雑草（花）など、小さなビニール袋に入れて、自宅や園に持ち帰り、お互い本など（図鑑）で確かめ合うこと。積極的に園外活動を実施して行く。自然の中で観察・発見・収穫の喜びを大切にその後の保育につないで行く。 つくし取り、菜の花、つつじ見物、よもぎ摘み、たけのこ、梅の実を取り梅干しやなから漬けを作ったりなど、自然の恵みを肌で感じ、楽しむことを保育に取り入れる。園外へ出て、どんぐりやまつぼっくり、イチヨウの葉や草花を取って来て、製作活動をする…とにかく子どもに自分の回りの自然についてたっぷり体験させることが大切だと思う。 以上、延べ57園が記述
保育者の重要性、 問題点、養成等	まず、保育士が自然を知ることが必要だと思う。昔の保育士に比べ、今の保育士は自分自身が子どもの頃の経験が少なかったのか、植物の名前やあそび方（草笛、葉笛、笹船など）、食べられるもの（つくし、ふきのとう、ぜんまいなど）、自然に関する知識がなさすぎると思う。そのため、保育士自身の勉強や研修が必要だと思う。 時間に追われている日常では、自然の悠大さを忘れてしまう。まずは大人（教師・保護者）が実感できる体験の場が必要（研修）。教諭免許状を取得する学校でも取り入れてみるのもいいと思う。 保護者自身の研究（教材研究）をしっかりと行う。 以上、延べ50園が記述
五感を使った体 験の重要性	五感を十分に利用できるように、実際に自然と触れ合う保育。野菜や花の栽培や、動物の世話などの体験。植えたり、収穫、また餌をあげることでなく、畑の草取り（管理）や、動物のフンの掃除（小屋）等も含みます。 四季を肌身で感じ取る為に、四季折々の草花、生物、夏は水あそび、雪がふればさわらせたり（氷も同じ）、秋の野山を散歩させたり、木の実拾い、それらを使った製作、絵画、栽培した野菜（旬）の物を味わせる、又は、時にふれ自然のこわさ等も見聞きた時にはお話しする等、大自然を感じ取らせることは大切だと。 周りに自然があるのであれば、子どもたちの創造力を豊かにしたり、自然の中にある物で季節感もわかるし、事前に図鑑を見せたりしておくのも、実際に自然に入り目にした時に感じるものがあると思う。実際にやってみて、子どもたちがどうだったかというのを話せる機会があると良いと思う。 以上、延べ35園が記述
農業体験	当園では「食育」を通して環境問題、生命などを子ども達が学ぶことができたらと思い3年目になりました。園庭で小さな菜園を作り食育活動クッキングなどで「生きる」ということを学べたらと思い取り組んでいます。 自然と生活そのものが密着し、一貫性があることを、植物や野菜を育て、大きくなる過程から、収穫したものをいただき、又それが、土に返っていくことを保育の中で実践できればと思います。 以上、延べ17園が記述
安全面・計画の 重要性・保護者	自然を活かした保育活動をする為には、その時期をのがさないことが大事なので、年間を見通した計画が必要 自然の中に存在する危険を知ることが大切である。保育士が動植物について知っておく。上記を知った上で、保護者に対して、少しのケガはすることを伝え、ケガをした場合にそのケガの様子をしっかりと伝える。 以上、延べ18園が記述
日本の四季・伝統	先人の生活の知恵として、身近な自然物を活用した生活の仕方や、物を大切に作る心、もったいないという無駄のない生活の仕方を学ぶことが大切だと思います。 以上、延べ5園が記述
エコ活動	当園はエコ活動にも取り組んでいます。自分達の活動が環境にやさしい活動である事は話していますが日常的にくり返し行うことがいつの間にか自然を含む環境にやさしい活動であった…という形が理想だと思います。 以上、延べ4園が記述

関わりに関する活動や、自然の循環に気づく活動において顕著に表れた、(3) 幼児期の環境教育を推進していくにあたっては保育者の存在が極めて重要であり、自然や環境に関する研修の必要性が指摘された。

## 謝 辞

質問紙調査を実施するにあたりましては、保育現場にあって、より良い保育のために真摯にご努力され、ご多忙中にある多くの保育園長、主任保育士等の先生方のご協力をいただきました。この場を借りて、御礼申し上げます。

## 引用文献

有賀克明(2008) いつでもどこでも環境保育—自然・人・

未来へつなぐ保育実践 有賀克明(編著) pp.10-47, フレーベル館。

井上美智子(2001) 幼稚園教諭の環境教育に対する認知度と実践の実態に関する調査研究 環境教育 11(2): 80-86.

井上美智子(2012) 幼児期からの環境教育—持続可能な社会にむけて環境観を育てる 昭和堂。

井上美智子・無藤 隆(2007) 幼稚園・保育所における自然体験活動の実施実態 教育福祉研究 33: 1-9.

## 注 記

本研究は、平成22-25年度科学研究費補助金若手研究(B)により実施したものである。